

L a f o r c e d u B i e

マレク・アルテール

Marek Halter

幸田礼雅 訳

Norimasa Koda

救出者

なぜユダヤ人を助けたか

レク・アルテール

Marek Halter

幸田礼雅訳

Norimasa Koda

江苏工业学院图书馆
藏书章

なぜユダヤ人を助けたか

救出者——なぜユダヤ人を助けたか

1997年2月25日 第1刷発行

著 者——マレク・アルテール

訳 者——幸田礼雅

発行者——安藤龍男

発行所——日本放送出版協会

〒150-81 東京都渋谷区宇田川町 41-1

電話 (03)3780-3319 (編集)

(03)3780-3339 (営業)

振替 00110-1-49701

印 刷——三秀舎／近代美術

製 本——石津製本

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

Japanese Edition Copyright ©1997 Norimasa Koda

ISBN 4-14-080301-0 C0022 Printed in Japan

国く日本複写権センター委託出版物

本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

救 出 者

なぜユダヤ人を助けたか

La force du Bien

救 出 者

目 次

プロローグ — 唯一の希望 7

I 祖国へ — ボーランド 11

イディッシュ語 二五〇〇人の子供たち 英雄 悪い顔つき
線路 神の子 思索 恐怖との闘い 三つの系統 投票

II ナチの国でも — ドイツ 71

壁 潜水夫 預言者 ……だから 世論 臆病者
地獄に堕ちた勇者ども 悔恨者 人間という家族 一杯の水

III アンネ・フランクの国 — オランダ 131

水晶の夜 同胞 裁き 記念碑 玄関のベル

IV 遥かなる逃避行 — リトアニア 161

日本領事 エルサレムの日本人 クロゼットの中

V 正義の国民 — デンマーク 183

漁船 ギャーダ三号 新年の散歩 タクシー

集團的抵抗　さすらいの航海

VI

有刺鉄線

—— アメリカ、スイス

215

美しい空間エール・ペル

小川　頭を掻いて　片方だけの靴

VII

最後の証人

—— ボスニア、トルコ

245

助け助けられ　蠟燭を灯す　奇妙な旅

VIII

警官と牧師

—— フランス

267

子供はいない！　ウサギ小屋　ツバメ　自分を忘れる
病人　セヴエンヌの女　四つの罪

IX

善の感染

—— イタリアから

319

教皇　一枚の葉書　何もしなかった人びと
はったり　ラムス城の農業学校　魂の再建

エピローグ

—— 三六人の善意の人びと

383

訳者あとがき

391

プロローグ

——
唯一の希望

「善」は存在するか？

それはいつでも、どこにでも現れるのか？

本書は、「悪」の深淵の中に、かすかな希望とわずかな善の輝きを求めてさまよった男の記録である。私という男が魂や良心といった心の世界をさまよひ、それらの反響に耳を傾けながら歩きつづけた、旅の記録である。こんなことをいうと今日の人びとは笑うかも知れない。だが今日でも不正や、同胞が殺しあう戦争が我々の目の前で行われている以上、このような言葉は、我々の心の中心におかれなければなるまい。サラエボ、キガリ「ルワンダの首都」、アルジェ、グロズヌイ「ロシア南部のチェチエンの首都」、エレヴァン「アルメニアの首都」、リマ「ペルーの首都」、キト「エクアドルの首都」——それに平和的妥協の図れない中東も忘れてはいけない。殺戮の現場を数えあげれば、否応なく過去の民族虐殺へと記憶はつながっていく。

「泣いても笑ってもいけない。ただ理解することが大切だ」と、スピノザは書いている。「理解すること」とは、つまりかつて卑怯者や殺人者が幅をきかせた時代に、ためらうことなく多くの命を救った人びとを理解することである。

もちろんそういう人びとは少数であつたし、多くの場合、彼らは素朴で自発的な気持ちから動いた人びとであつた。策略を弄したり、英雄主義や聖人を気取ったりせず、つねに「善意」から行動した人びとであつた。《タルムード》「ユダヤ教の律法や宗教的伝承をうじたちが集大成した書」によれば、いつの時代にもそういう世界を支える人はいるとされる。「世界は三六人の正義の人びとによって支えられ

ている」と、ラビ「ユダヤの律法博士にたいする敬称」の「アベイエはいう。「いや一万八〇〇〇人だ」というのは、ラビ、ラッバの言葉だ。パスカルはそうした計算しがたい数を九〇〇〇〇人と計算した……。

どうしてもっと早く、私はこうした記録に思いをいたさなかったのだろうか？ なぜ私は、こうした正義の人びとの行動を調べて、彼らの歴史を書こうと思いたつまでに、こんなにも時間をかけてしまったのか？ たぶんそれは、私がすべてのユダヤ人と同じように、悪の証言さえあれば事は足りると信じていたからだろう。どうやら私も、世界中の人が一人残らず責められるべきだと思ひこんでいたらしい。

はつきりいつて、こうした正義の人びとの行為は、殺人を犯したり、それを見逃したりした人びとの不名誉を決して減らすものではない。最終的にはそれは、この不名誉をいっそう増大させることになる。なぜならば、苦しんでいる人びとを助ける人間がいたのに、どうしてほかの人びとはそうしなかったのか、という疑問がわくからだ。

以上のことは、もつと前に、しかも声を大にして言うべきであつたかも知れない。あの少数の人びとがいたおかげで、現在の我々は人間性に絶望せずいられるのだから。私がこのことにこんなにもこだわるのは、彼らが現代史の唯一の肯定的側面を示しているからである。命を賭けて彼らが示した善にたいする意識を理解しようとするからこそが、今急がれているのではないか。この善の意識について考えれば考えるほど、私は畏怖を感じざるを得ない。彼らの目の奥底に希望の光が輝き、その光

と彼らの表情、彼らの声を通して表れたこの意識こそ、たとえ一瞬でも私のとらえようとした、私の表現しようとしたものにはかならない。

こうした正義の人びととの出会いを求めて、わずかな、ときには不確かな情報をもったままで、私は旅に出なければならなかった。これらの旅から私は、もうどうにも逃れるわけにはいかなかった。なぜならばこれらの旅は、記憶の糸がとぎれがちな私の心の中で、今改めて拡がっていくからだ。こういう旅は、果てしなく繰り返される。世代は変わる。しかしこの記憶だけは、我々の中に永遠に生きつづけるであろう。

記憶の世界で、我々は『善』にどのような位置を与えるべきであろうか？

『善』の記憶そのものが、我々に欠けてはいないだろうか？

この『善』の記憶こそは、我々の唯一の希望であり、そしてあえていうならば最後の砦ではないだろうか？

それにしても一体『善』とは何なのだろう？

I

祖国へ

——
ポーランド

イディッシュ語

泣いてはだめよ

泣いてはだめ、ね、坊や

空は曇って

灰色だけど

暗くて気味が悪いけど

雲の上にはいつだって

青い青い空が

輝いているのよ

そもそもの始まりは、母がつくつたこのイディッシュ語「中高ドイツ語の方言にヘブライ語やスラブ語が混じった言語で、主にヨーロッパのユダヤ人が話す」の子守歌だ。この歌を聞くと私の心はもうどうしても、幼年時代へ、生まれ故郷のワルシャワへとタイム・スリップしてしまう。

というわけで、私の旅はワルシャワから始まる。もう四〇年、私はあそこに帰っていない。悲しい

都市、ワルシャワ。一九九四年一月のワルシャワは、寒くて雪が降っている。道行く人びとはみなソ連製の服（泥だらけの靴、合成繊維のマントとまがいものの毛皮）を着て、一団となって大急ぎで街路を横断していく。空は重苦しく、女たちは毛糸の帽子のせいで醜く見える。古ぼけた赤い市電が、車体全体できしんだ音をたてながら進む。長い間聞かなかったあのブレーキの金属音に、身も心もすくむ。

ビスワ河の流れを見つめる。水位が低く、ところどころ砂州がむき出しになっている。ポケットの中のメモには、目指す五人の「正義の人びと」のリストがある。大戦中ユダヤ人を助けたといわれる五人のポーランド人のリストである。あらかじめ考えていたわけではなく、足の向くまま幼年時代を過ごしたスモチャ街へ行く。

一〇〇〇年以上前からユダヤ人が生きてきた我が祖国ポーランドに来て、私は一体何をしようというのか？

ポーランドにおけるユダヤ人の存在は、七世紀より知られていた。カドルーベク司教の《年代記》によると、一一七〇年から一一八〇年頃、すでに多くのユダヤ人がクラクフに住み、国王の保護を受けていたそうである。しかもこの時代、ユダヤ人はヨーロッパのほとんど至るところで迫害されていた。

戦前のポーランドには、三五〇万人すなわち国の人口の一〇パーセントを占めるユダヤ人が暮らしていた。ナチの迫害を逃れたのはわずか一〇万人、その大半は国外に逃げ、ソ連に庇護を求めた。現

に残っているユダヤ人は八〇〇〇人であり、彼らの多くは高齢で病気に侵されている。とはいえ、こうしたユダヤ人の存在は、ポーランドの古典文学や歴史の教科書に消しがたい足跡を残した。

だが今、私が育ったあの街路、あの街角、あの市街は跡形も残ってはいない。すべてが破壊され、そしてすべてが大戦後に建て直された。廃墟が取り除かれることもなく、その上から手当たり次第に再建がなされた。町のこのあたりは、何世紀にもわたってユダヤ人街だったところだ。そこは地面が一段と高くなっていて、階段か急な坂から入るようになっていた。大昔からの習慣に従って、生者の家が死者の家の上に次々と重ねられてきた。この階段もあの坂も、呑みこまれた世界が下に眠っている証だ。大通り、事務所、店舗、仕事場、図書館、街路、路地、階段、共同洗濯場、井戸、噴水、学校……一つの世界のすべてがそっくり眠っているのだ。

スモチャ街で残っているものといえば、壁面にはめこまれたほうろうの標示板しかない。つまり、私の生まれた土地の目印は、この町名の文字板と赤れんがのあの教会しかないというわけだ。幼年時代、家のバルコニーから見ていた赤れんがの、醜いとはいわれないが平凡なあの教会だけが爆撃を免れた。

だがバルコニーの方はどこへ行ったのだ？ それとあの街路は？

呑みこまれたあの世界のうつろな空間には、ある不安、つまりある響きの不在がふくまれている。ここには私の母語であるイディッシュ語が聞こえない。そう、この沈黙は私には一つの欠落、痛み、い傷に感じられる。